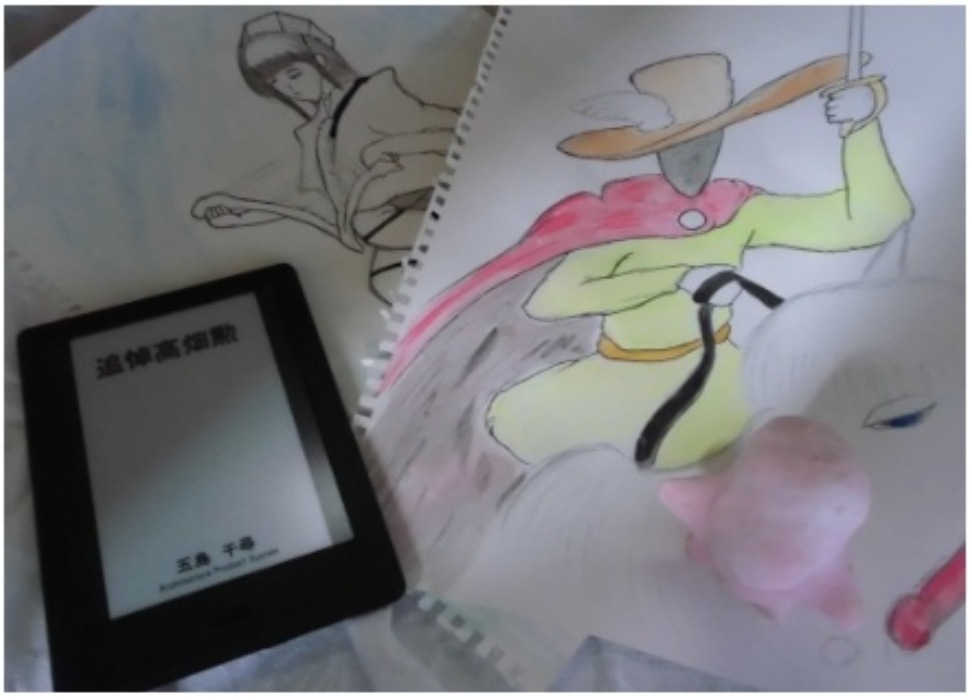
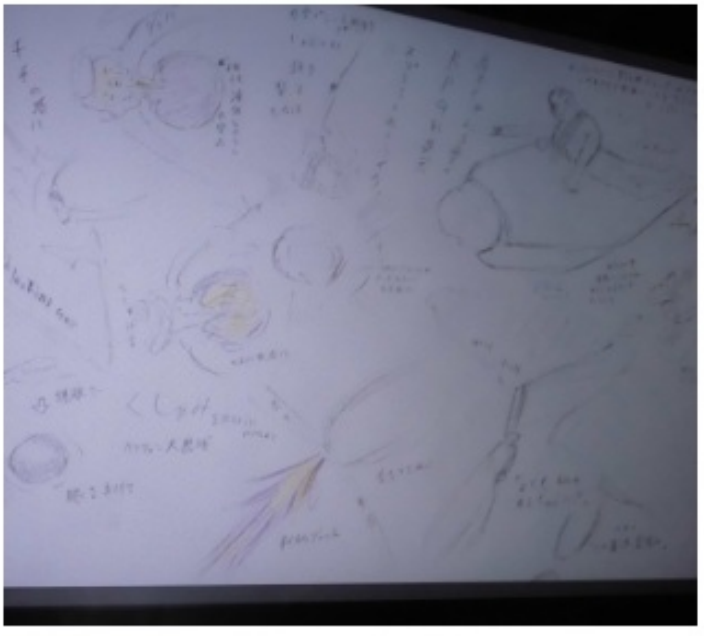

追悼高畑勲
五島 千尋



U2

UからsakUへ

桜庭の人気

『2000年の桜庭和志』は「Sports Graphic Number」の連載を追って、読んでいた。
桜庭和志とは有名な武藤が高田にドラゴンスクリューを決めている写真に、セコンドでリング際、ロープ下にいる姿が映っている。
プロレスから派生したＵＷＦから枝分かれした先にあるＵＷＦインターナショナルの選手であった。いわゆるＵインター、簡単で乱暴な説明だと高田延彦を支持する高田派が集まって興行をしていた。そうしたプロレス団体には道場があり、そこへ入ってきた若者が桜庭である。
年月が経ち、日本発の柔術がブラジルに渡り浸透後、独自の進化を遂げた先にあるグレイシー柔術、それを広めるために開催されたＵＦＣが、やがて日本に上陸する。
この二つの流れを、桜庭はしあわせチョップのように合わせてしまったのである。
ＵＦＣジャパンに出場して優勝し、ＰＲＩＤＥでグレイシー一族を連続で撃破し、その人気は、すごかった。マンガ評論家の夏目房之介さんは『ＢＥＣＫ』のサクを桜庭からとられていると指摘している。太極拳を健康のためにする人は、もちろん格闘技を人並み以上に知っている。
バンド名も海外向けには、モンゴリアンチョップとされていた。ストーリー的にも、いじめられているコユキがサクの登場で救われる。
プロレスの救世主的活躍の桜庭になぞらえている。
ＵＦＣが出た頃はまだ、日本の格闘技界はＭＭＡでスター選手を作れていなかった。佐山のやっている事は十年も早かったが、いかんせん、選手がまだ育っていなかった。90年代も後半さしかかった時に、朝日昇がグレイシー柔術に勝つには後三年かかると、
直接、グレイシーと戦い始めると、Ｕインター組がヒクソンに負け続けて、プロレスファンは肩身のせまい思いをしていた。
「プロレスラーは勝ち負けが決まった試合にしか、勝てないぞ」
という、揶揄をされたわけではないと思う。
しかし、プロレス最強を信じていた。そういう根強いファンに支えられていた。
プロレスファンの溜飲を下げるような、活躍であった。
彼もファンのために、プロレスラーであるとコメントする。
厳密にはレスラーではある事はあるが、プロフェッショナルレスリングの略ではないプロレスのレスラーであるかは、一応デビューしているので、否定することはできない。
しかし、
猪木がＰＲＩＤＥのリングに上がって、遡ればＵインターの系統にはちゃんと70年代に異種格闘技戦を戦った自分の「血」が入っている事をファンに改めて周知させた「政治」

リンク

Ｕ２
Ｕ
グリーンブック（「Ｕ」収録）
2UF

『1976年のアントニオ猪木』
『1984年のＵＷＦ』
『2000年の桜庭和志』

『1964年のジャイアント馬場』
『1985年のクラッシュ・ギャルズ』
？

オレならこう撮る

五島千尋
Architecture Product System

『けいおん！』お父さんのお涙エクスプロイテーション編

二つのエディションのうち、もうひとつは親父……映画で、お父さんのお涙エクスプロイテーション映画を作ってあそぼ。

バーフバリ二部作で二つの言語で作る。二つの言語の二部作じゃない。ヒンディー語とテルグ語のセリフを２テイクやるという。さらにタミル語も場合によっては撮り、３テイク撮る。

これは人口が単純に多くて、やはり単純に考えて10億人以上の人口三分の一で一つの言語カテゴリーに３億の観客がいるから起こる。日本の人口の二倍の潜在的観客がいたら、それは撮影するだろう。

では、日本の場合、潜在的観客はお父さんなわけで、そのお父さん向けのエディションを考える。考えた結果、日本の軽音楽の始原には、はっぴいえんどがいて、彼らへのリスペクトとオマージュがあれば、お父さん世代をなんとかできるんじゃないか？　「ふわふわタイム」をはっぴいえんど風の曲や歌い方に、リファインすれば今までマンガを読んでくれなかった、いしかわじゅん先生の世代も、映画をまず観てくれる。

『この世界の片隅に』のように、この層をグリップできれば、トリクルダウンができる気がする。どんなに政府が経済政策をしてもできなかったトリクルダウンをお父さんのお涙で出切るはず。

はっぴいえんど調の歌と娘じゃない女の子の女子高文化祭に安全にピーピングできる映画、それはお金を払って観る価値があるだろう。

だけど、秋山澪が落としたハンカチを曽我部さんの一人称カメラでハンカチを拾って臭いを嗅ぐ、画面もピンク色になる。これが「本当のピンク映画」と。

しましまのパンツが落ちていて、それも臭いを嗅いでしまったら、映倫から視聴制限のお達しがくる!!　それはえりきゅんにやらせられない。

#Me too

新歓ライブで中野梓にあたるだろう女の子がライブを観て、軽音楽部に入る、それは娘たちがこんなにいい子に育ちましたという、

「夢」

を与えるため、夢を見せる、それは押井本でも書いてある。まるで宣伝のようだが、「押井本は役に立つ」のである。

娘の通う文化祭に紛れ込んでしまった父兄さんの感覚で、たてかべ和也が生前、二代目ジャイアンの声である木村昴の文化祭にきてくれた話を思い出して、その話からふくらませて、ハーフで皆となじめているか、心配だったんだよ。肝付さんとのエピソードを考えると、たてかべさんは情に厚い人。

まあ、心配は杞憂で、皆と楽しくやっているのを見て、それで亡くなっている。

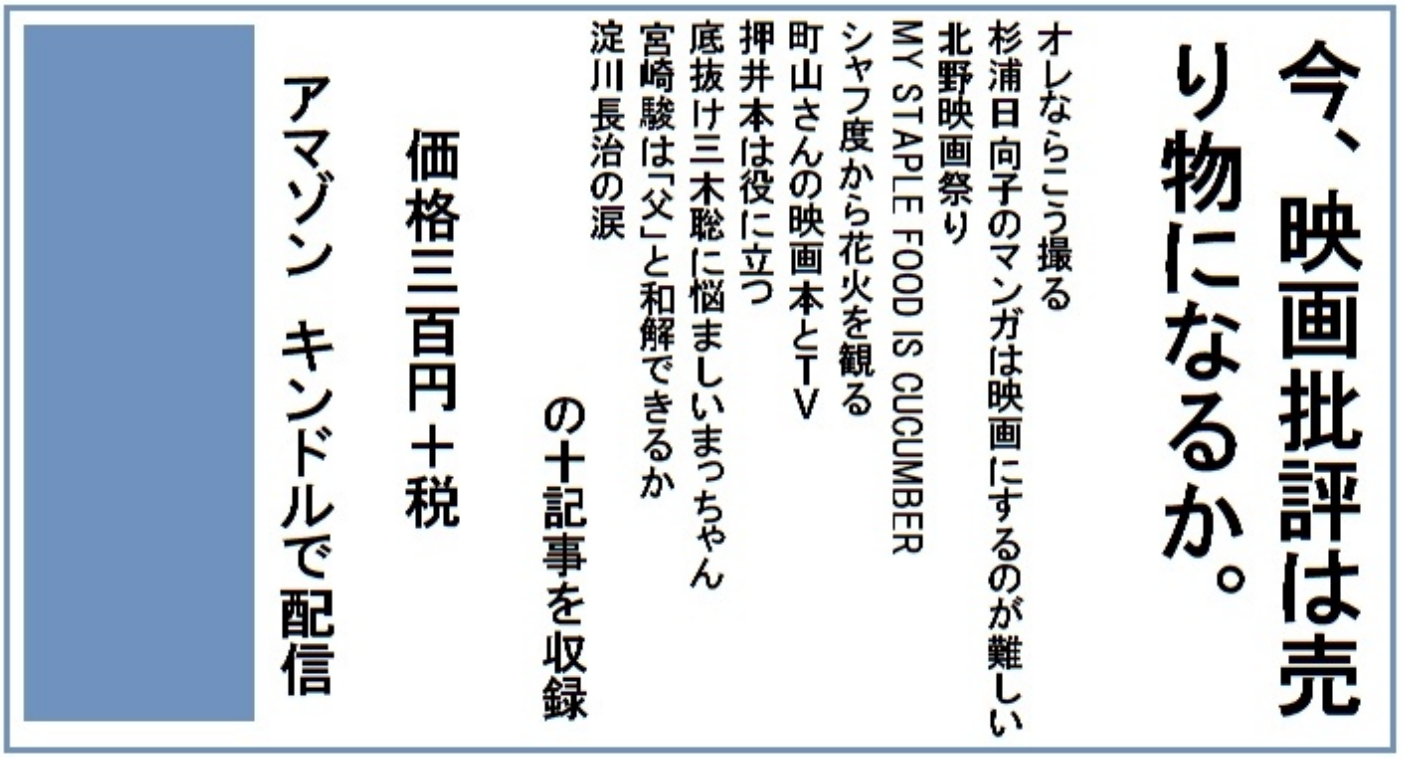
用意されたハッピーエンド、この親父……お父さんを押さえれば、そこから下に涙がトリクルダウンである。みうらじゅんさんの言う、涙のカツアゲ。

日本に政府がいくら経済政策してもできなかったトリクルダウンが……うっかり同じことを二

回書いてしまったが、暴走中だから。暴走中だったから。
　泣き活しにきたやつらから（人差し指と親指で輪を作る）コレをエクスプロイテーションできる。
　だから、原作者にはねぇ、
　「また新しい楽曲を作って、音楽著作権料が入りますよ。

リンク

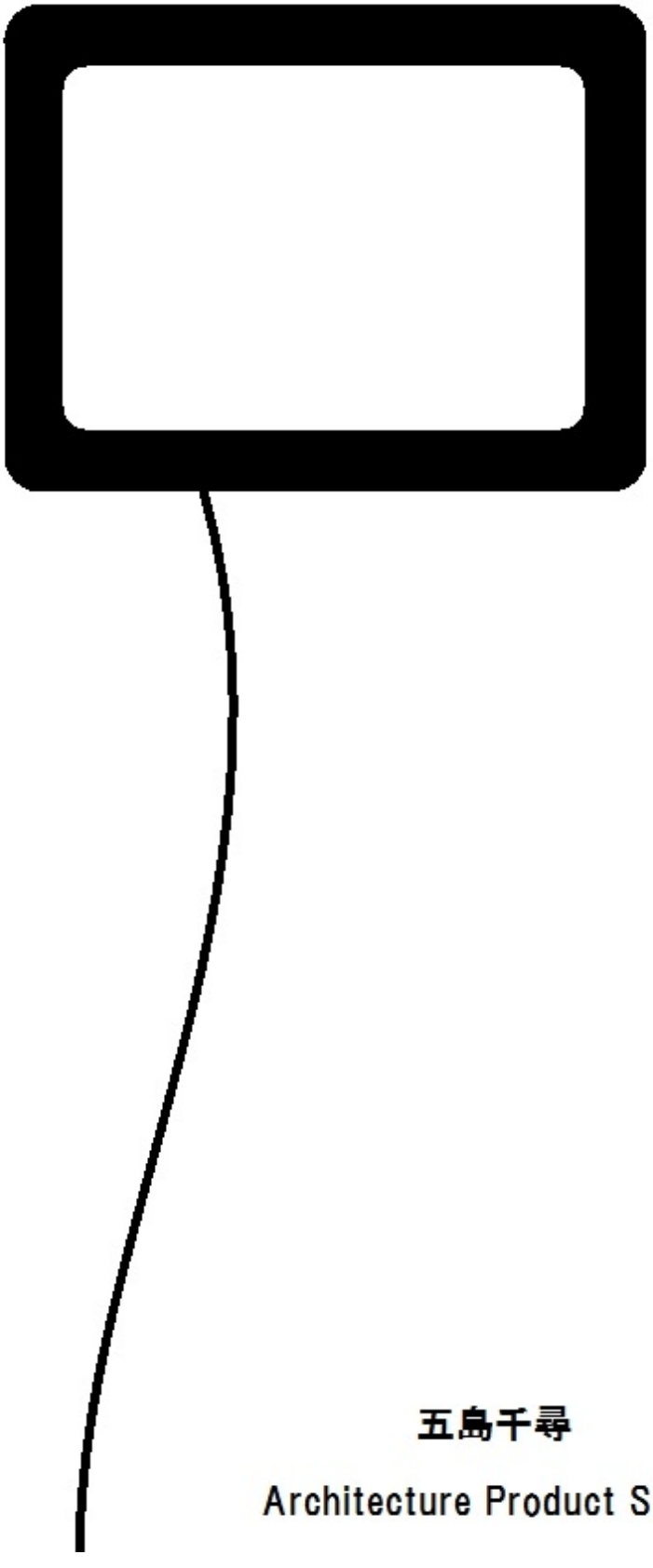
[今、映画批評は売り物になるか。](#)
[オレならこう撮る](#)
[もしも、実写映画の『けいおん！』を撮影するなら、オレならこう撮る](#)



広告

キンドルにあるよ
本編も鋭意執筆中

このラベルはきれいにはがせます



テレビを明るくふりかえろう

ノンスクランブル放送版

五島千尋

Architecture Product System

あらゆるスポーツライティングは山際淳司を越えられない

　たまたま村上春樹を読んで、その川上にはチャンドラーの流れが入っているのは、二人のレイモンドの内、レイモンド・チャンドラーがいるのは、日本文学を知っていれば、だいたいは「長いお別れ」を代表とするフィリップ・マーロウが出る小説の影響を受けていると、だいたい知っている。
　もう一人日本には、チャンドラーの影響を受けた作家がいた。
　山際淳司である。
　野球中継しか観ない人は、山際のテキストはお目にかかっていない。しかし、「江夏の21球」は誰でも知っている。「Sports Graphic Number」の創刊号にスポーツ・ノンフィクション「江夏の21球」を書いて、NHKスペシャルにもなる、ビデオソフトにもなっている。いまだに再放送される。
　スターライターとして、NHKの「サンデースポーツ」のキャスターにもなる。
　「百人の偉人伝説」でも元ネタとして参考にされた「たった一人のオリンピック」を執筆している。
　安売りマムシドリンクをストックしている事を、「いかにもそれらしい」と書いて、取材対象者の本人は「脚色が過ぎる」と苦言も呈している。
　私も影響され、もじって「たった一人のフライボール革命」の元ネタである。
　ハルキ・ムラカミは海外作家の影響を受けているので、
ジュンジ・ヤマギワも翻訳されたら、
　クアーズフィールドのフェアリーテールというのも、山際の修辞のマネである。
　ＴＶ番組「知ってるつもり？」では、江夏との対話で「21球」を著したとわかる。
　ホテルの一室を借り、ビデオを繰り返し再生し衣笠と、どういうやりとりがあったのか、語られていた。
　一塁から来た衣笠も「オレも同じ気持ちや」と、発言したのを、口を割らせた。「オレも一緒に辞めてやる」と、江夏をなだめた。衣笠が亡くなった時にも語られた名エピソードである。
　山際はフィクションも書いているが、『イエローサブマリン』で、野茂が大リーグで活躍するのに先駆けて、マイナーから登っていって、第二の日本人メジャーリーガーが生まれる予想を描いた。
　だが、野茂の活躍を、ほぼ見れないで亡くなる。山際の死と交代するように、メジャーリーガーたちが、次々と海を渡っていく。イチローに松井、松坂上原。
　文芸評論家も『イエローサブマリン』が予見的である事を、肯定的に評価する。
　もし生きていたら、村田兆冶の「カムバック」のように、桑田の「カムバック」があったはずだ。
　石田雄太の『桑田のピッチャーズバイブル』で、その継承を図ったと思う。
　私は、山際と同じ打席に立てなかった。
　小説を書いて作家として商売をできず、記事を売るライターもできず、ただ腐るのみだ。それ

が人生であると認めるには若すぎた頃もあって反発もあったが、もうない。
　今はもう、反発するエネルギーも無い。
　もう私は、それほど若くないのだ。
　本当は、本書は「週刊ベースボール」に掲載されるなどの、商業媒体での露出であったはずだ。連載や、単発のコラムでプロ野球、広い野球の話を書いていく。そのまとまりが、本書に収録される。
　ノンフィクションや小説などを問わず。
　それだけ、私はプロ野球が大好きだった。そして、山際も愛していた。
　しかし、山際のようには、なれない。
　プロ野球選手になれる、才能を持った人間は少ないように、紙媒体で活躍できる才能も実は少ない。
　単純に私に才能がなかっただけである。
　まあ、そういうことである。

特別掲載　ノムさんは外国人がお嫌い

　これは別場所で「上げた」ものをニコイチにした、ぜんぜん商品価値の無い、浅井長政の頭蓋骨で杯を作る、死人にムチ打ち企画である。

　それで建国記念日に、ノムさんが死んだ朝の一報が届いて、「ノムさんの風除けでスリップストリーム優勝」と同じネタをやって、「なんだこれは？」と思った。
　野村克也というと、選手時代（ムース）と、監督時代（ノムさん）に分れるのか、それは調べてないので、わからない。
　誰も、私の提唱するドラッカーの『マネジメント』で出てきた、マネジメント能力があるボスにあたる人として、例示できるのは宮崎駿とノムさんと、言っていたが、ドラッカーブームも、一過性で定着しなかったのだろう。
　マネジメントでうまくいくなら、日本経済は今、うまくいっている。
　経営者としてカルロス・ゴーンさんは、単なる銭ゲバだったのだろうか。
　『ドカベン プロ野球編』の第一巻、ドラフト一位に山田を指名して競合したから、くじをひいて、「南無さん　いや　ノムさん」という水島ギャグが出る。
　そんな面白くない方の水島ギャグ（フォローを入れるとシリアスな笑いはけっこう面白い）にされてしまったノムさんが、自分が南無阿弥陀仏した。
　最後に外国人排外主義者として、自分が排外されるとは、「おシャカさまでも思うまい♪」と。
　阪神タイガース時代、ぜんぜん勝てなかった。高給腕時計が大好きでシダックス監督で収入が減ったのに買っていた。メイが彼女となんかやってるのも、現役時代、糟糠の妻から佐千代に乗り換えた件を考えると、人の事を悪く言えないんじゃないか、と死んで本人から文句を言われないから、安心して言える。
　鼻持ちならないボスには、こうして必ず弱点がある。

　ノムさんの死で、特需を狙いたい。張本に特需は無い。
　衣笠が死んだ時、間違ってハリさんが亡くなったと、書いてしまったけど、別にハリさんじゃ死亡特需が無いので、小さなメディアだから言えるけど、『アストロ球団』の「オヤジをかたわにして、俺もかたわにする気か」という･･･テレビや新聞各誌は、故人を忍ぶＶＴＲや記事で、野村万歳（のむらマンセー）である。それでは、私は大衆週刊誌的な悪評も書かないと、いけないポジションな気がする。
　ノムさん、21世紀のダイバーシティな思想とはあいいれない、外国人蔑視だ。外国助っ人人（「がいこくすけっとじん」と読む）が逃げていく。
　それで、偶然、ぐうぜんに『イチロー革命』を読んでいて、そこで書かれたことを、丸写しス

レスレでよくないが、人に節制をしろとか努めるくせに、ハドラーら外国人選手たちの挨拶を返さない。人として基本的なことをしないのに、人生訓を説いても無駄でさ、私ならそんな奴の言う事を聞かない。

ホーナーの怒りの大半はこのボスへの反発。ダリル・メイとの確執なんて、「アイ・ドント・ライク・ノムラサン」で、巨人に移籍して復讐球団化。

そういえば、覚えがあるのは郭李などのアジアの人たちも、なんか球団を去っていたような。中込は去って当然。

成績がいいパリッシュとオマリーを放出するが、ノムさんだけが悪いのではなく、どうも予算がはみ出して、その煽りを外国人選手に回しているだけなようでもある。優勝反動で球団経営が悪くなる。

だから、ノムさんの持論であるノビノビ野球が悪いのではなく、

楽天は何も言わないが、ロッテ（重光）が伊良部の念書をオープンにしたみたいに、死んだんだからもう公開してほしい。これ以上続けさせると外国人差別問題が懸念されるから、追い出した方がチームのため。そして世間のため、と。

なんでこんな外国人排斥主義者かというと、映画にもなった『千と佐千代の金隠し（脱税）』の佐千代夫人の元ダンナ、義理の息子の団野村さんのお父さんが米国人だから、許せなかったんじゃないか。（ＮＴＲ≒ノムラ・アイディ野球・・・ジョークと書かないと信じる人いるかな？）

たぶん、プロ野球選手になっていなかったら、カネショーみたいに暴力団に一目置かれる存在となり、外国人排外主義ナショナリズムの大物フィクサーになっていたんじゃないか。

ミスターノム。

リンク

ゴトチヒの野球読本
野球読本　縮小版

APS活動報告書にて　ほぼ完成原稿あり

ゴトチヒの野球読本　CM

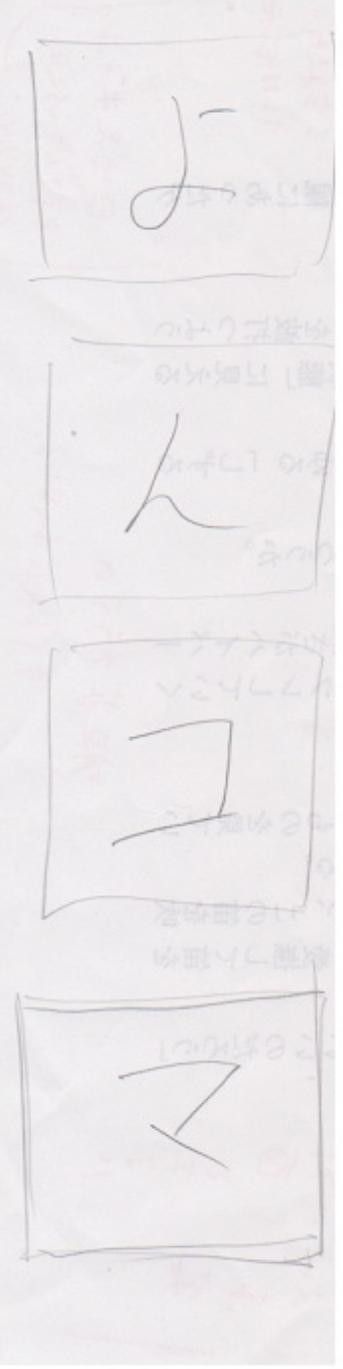
「たった一人の飛球革命」とか「あらゆるスポーツライティングは山際淳司を越えられない」とかを書いている

ちょっと使用予定の画像の一つ
江夏のサインポロシャツに並ぶ我が家の家宝かしら

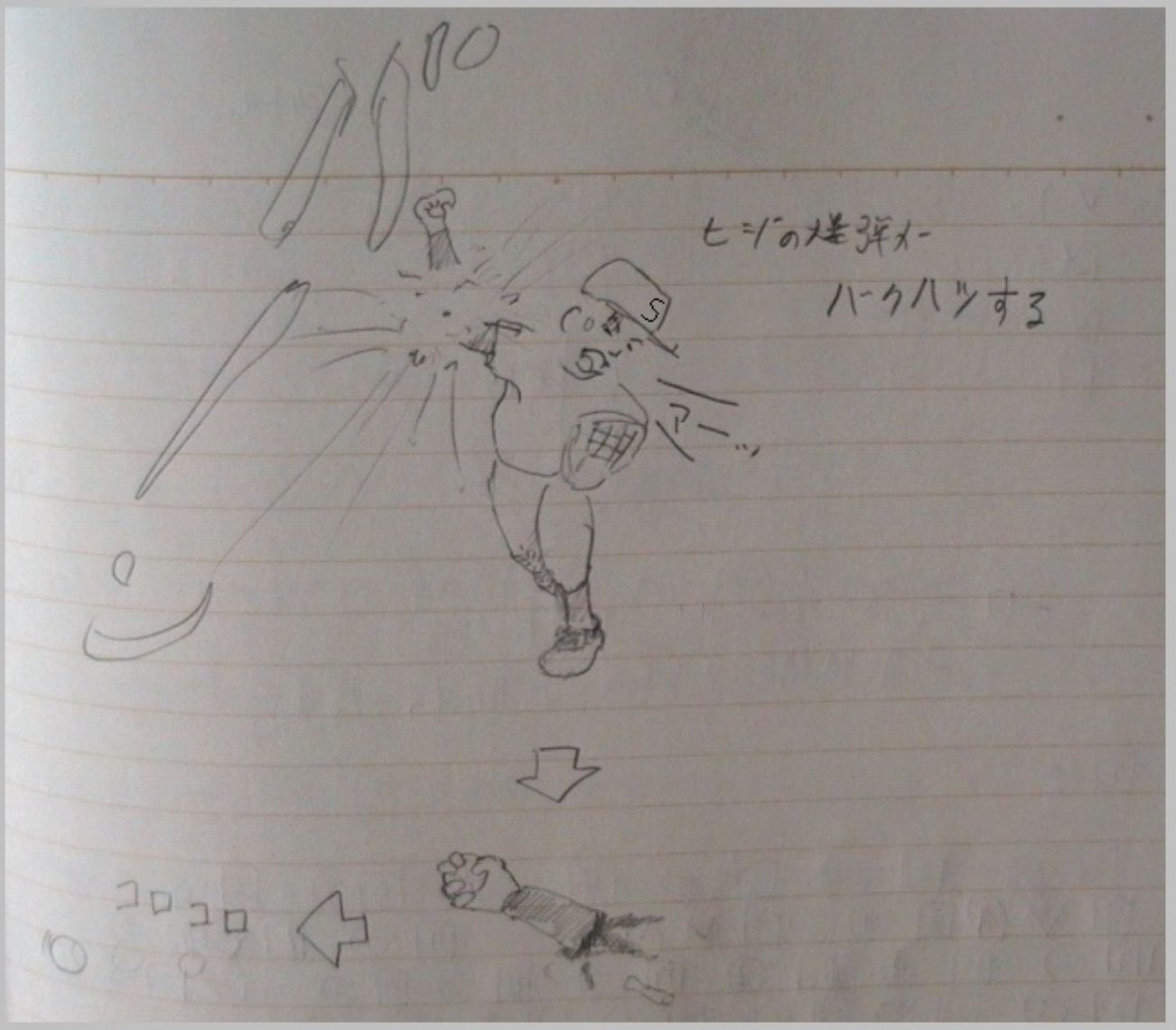
岩谷徹から返信が来たら家宝になったけどね

野球の四コマも ある

ドカベンパロディの四コママンガ



保土ヶ谷公園球場のマーク
おちんちんに見える(……回収)

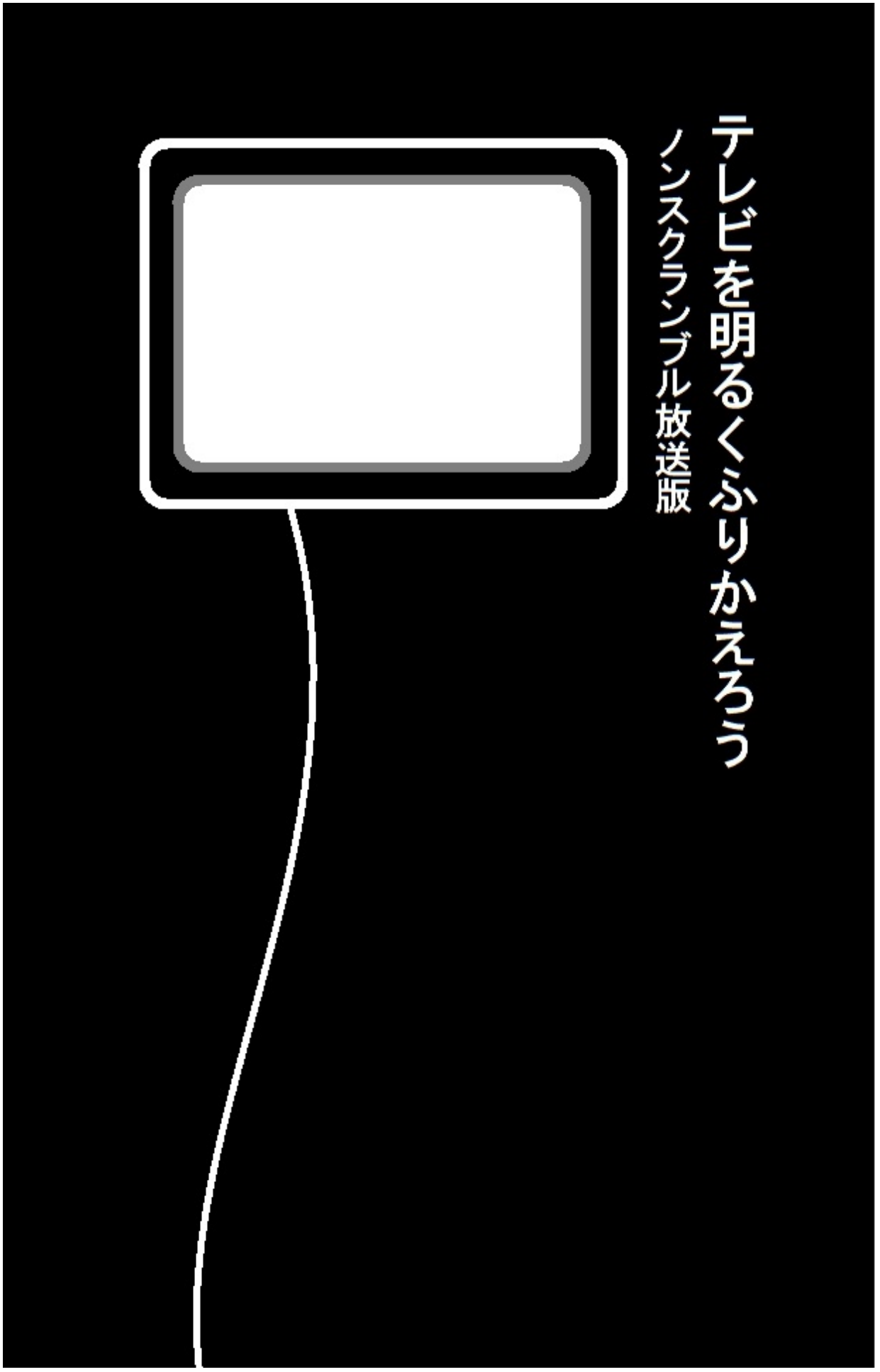


ヒジの爆弾が
爆発するの
文字情報が1コマ目

だから、なんとなく、四コマ

わかりやすく、マルキ・ド・佐渡高の選手である歴史修正主義がされているけど……（九人目のレフト）

『マルキ・ド・佐渡高校　高校野球編』から　あたっく阿尼丸高校　の登場シーン
セリフと闘犬の挿入が一致していない土佐丸高校をバカにしているわけではない
水島新司はシャレがきかないタイプだから


テレビを明るくふりかえろう
ノンスクランブル放送版

生き物地球紀行

「丸見え!」の裏番で、動物番組である。
天下のNHKだから、本放送一週間ぐらい経って流される再放送を観ればいいのに、わざわざビデオ録画してみていた。好きな番組だから、一度は観たことあるはずなのに、ツタヤでＤＶＤを借りてみたこともある。
たまに「丸見え!」を録画して、「生き物地球紀行」の方を観ることがある。
そんなに動物番組が好きだったのである。
「大自然。そこは生き物達のドラマがおりなす……」
あとのフレーズは忘れちゃったけど、おなじみのナレーションがある。
たしか「不思議と感動」がどうのこうのだったのではないか。
「ブループラネット」みたいな海外テレビ局と共同制作する、そのハシリであったと思う。自然ドキュメンタリーの番組の買い付け、あるいは制作費を一部出して番組作りをする。
今は番組の構造をちゃんと特許をとって、実用新案を押さえるという。
それは海外に丸パクリされることが多いからだ。
盗難アジアにいろいろ番組をパクられていた。
ナレーターも高気圧ガールだった宮崎美子にハンマーチャンスの柳生博……今から思うと、ヒゲじいの元ネタは博だったのか？
アニメ映画で流行った『美女と野獣』をもじって“美女と柳生”ということで、美女と柳生博を呼ぶ、出オチみたいな、企画があった。
同じネタを「ドラキュラが狙っている」でもやるはず。
柳生博はウィークデーで一日百万円を視聴者の中から選ばれたクイズ回答者に大盤振る舞いしていたクイズ番組の司会をしていた。今から考えると、この「百万円クイズハンター」は「そんな番組あったら、観ちゃうよ」である。
『クイズミリオミア』で全問正解なら一千万もらえるが、一問前の五百万で降りたら、みんなに「えー」と言われるが、ウイークデーで午前中の帯番組で毎週数百万円排出する、そんな大盤振る舞い、今できるか！
生き物地球紀行の話から、ずいぶんズレて柳生博のネタになってしまった。
懐かしい番組の記事を読み、思い出に浸りたいという、番組を高くを評価する方たちの思惑をひっくり返すのだが、コンラート・ローレンツ博士の『ソロモンの指輪』を読むと、どうも、擬人化がすぎる番組作りのテレビから、少し距離を置くように、なってしまう。
熱心に観なくなる。
動物行動学の洗礼を受けると、どうしてもそうなってしまう。
たぶん、「万物創世記」での発言と思われるが、ビートたけしの動物番組への批評である、擬人化して、猛獣の視点、草食動物の視点で動物に感情移入させる番組作りは、ちょっと違うんじゃないか？　と問題提起していた。
その批判もわからなくもないが、擬人化しないと、わかりにくい。

映画評論家は、副音声映画を嫌うけど、百万人が観客動員するものは、どうしても内面を副音声のように話してしまう映画でないと、一部のリテラシーの低い観客を切り捨ててしまう。

動物番組も擬人化しないと、視聴者を置いてきぼりにして、動物学者の解説だけだど、ただの教養番組になってしまう。

「丸見え!」では大人向け動物番組と言って差し支えない「ディスカバリーチャンネル」の野生動物を追う、だけど、吹き替えで笑いを入れる。女性爬虫類学者を「私は爬虫類レディ」と繰り返して言う。「クレイジージャーニー」のはしりである。

あの番組はやらせで、終わっちゃったけど。

タチバナさん……だったか、作曲家の名前を忘れたけど、

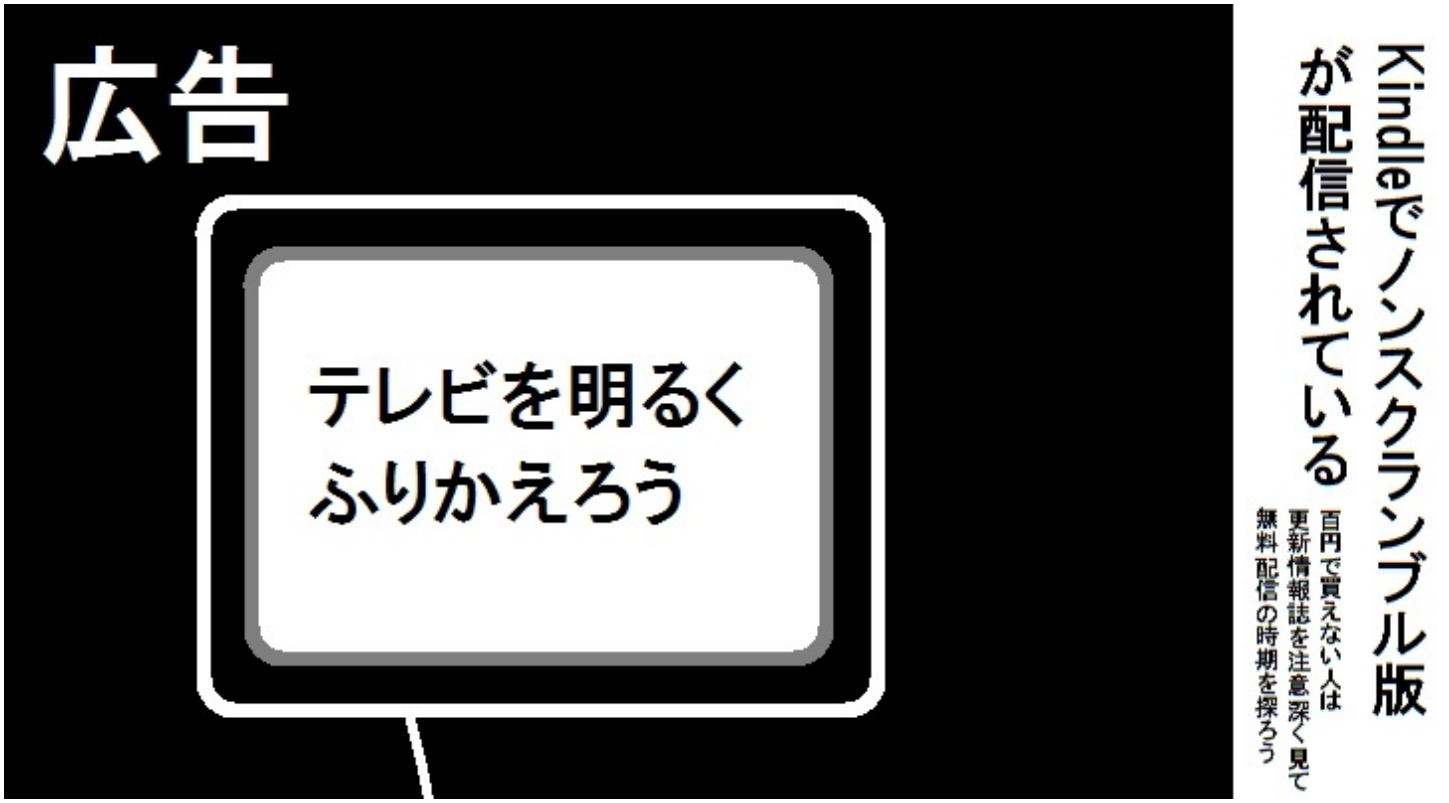
「トゥモロ〜♪」

番組は終わっちゃったけどね。

リンク

テレビを明るく振り返ろう

[テレビを明るく振り返ろう　ノンスクランブル放送版]



APS活動報告書にて　ほぼ完成原稿あり

随筆　検索ワードの記事「Ｇレコ」

　検索ワードに『Ｇのレコンギスタ』とある以上、何かひとつ無いといけないと考えて、この記事を書いている。まだ、2014年の12月で、話は中盤に入った頃である。新年が明けて番組を見た後、本項がどれほど正確であるのか、それとも目測を見誤っているのか、楽しみといえば楽しみであるが、恐ろしくもある。
　とりあえず、1クール13話までの話にしておこう。そうでないとエッセイが完結しない。
　少し解説がいるだろうことを、まず書く。
　Ｇセルフを鹵獲したのに、なぜ逃がしたのかは、キャピタル・アーミィの勢力拡大のため。
　クンパ・ルシータ大佐（アルゼンチンタンゴの曲名から偽名と示される？）の独り言が、なにかストーリー上の示唆があると思われるが、アイーダさんにわざとベルリらを連れて逃がして、アーミィの既成事実化を謀るためにやっている。海賊の対策や防備は、キャピタル・ガードが行う。しかし、海賊の討伐はアーミィが行い、運行長官の息子ベルリ奪還を大義名分で戦力増強投下ができる。
　シャア・アズナブルの「戦いは二手三手先に打つもの」だから、その後の新モビルスーツ開発投入が迅速なのも、ある程度見越していたのだろう。
　アイーダさんだけを逃がしたら、ガードの迎撃だけですんでいる。そのためアーミィ不要説が出てくる。ベルリも連れさせて逃すのが、今後の展開として重要だったのだ。ここで悪いあだ名（ポンコツ姫）がついているアイーダさんが有能だと、そもそも最初に鹵獲される物語上の都合が合わなくなる。モビルスーツのパイロットとして、無能の役回りをしないと、いけない。
　雑誌「CONTINE」に多根清史が連載していた「未来に残すゲームなコトバ」から孫引きすると、ニュータイプ思想などは予定より二ヶ月程早く終了が宣言されて数話短縮になり、オチをつけるための急ごしらえの設定だったという考察に、放送20年後ぐらいに「そうだよ」とゲロってくれたから、20年後にわかるんじゃないか。（出典元は『イデオンという伝説』）
　Ｇセルフを使うときも、後で触れる対談で、攻撃する時にだけビームサーベルの刀身は出さないものだけど、威嚇なのか必殺兵器を出してしまう（手の内を明かす）あたり、少し足りない。
　このように、お芝居の役回りをするキャラクターはどうしても出てくる。キャラクターのことを続けると、気になるのはラライヤが主人公のベルリに言わず、クリムに「キレイな瞳」と言っている。『ビルドファイターズトライ』だとちゃんと主人公に言っているけど？　瞳じゃなくてガンプラにだけどね。
　これはララァがアムロに「キレイな瞳」と言っていたことの、自己模倣だと思われる。「瞳が赤い」というのは、アイリスサインやレイハントン・コードのことだろう。

リンク

Ｇの煌めき

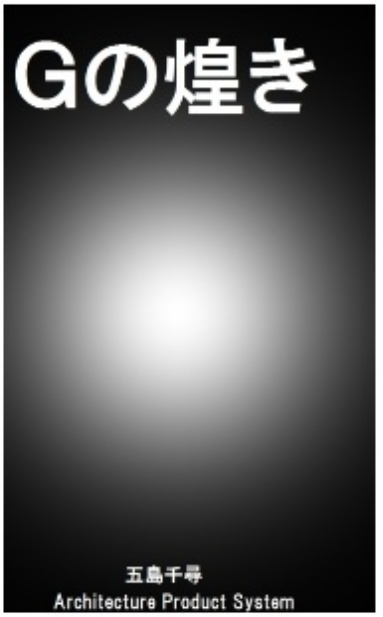
これはもはやガンダムではない

広告

Gの煌めき

「これはもはや-G-ではない」 の 前哨戦
非公式で画像を使わせてもらえない謎本と同じく
ガンダムの謎本である

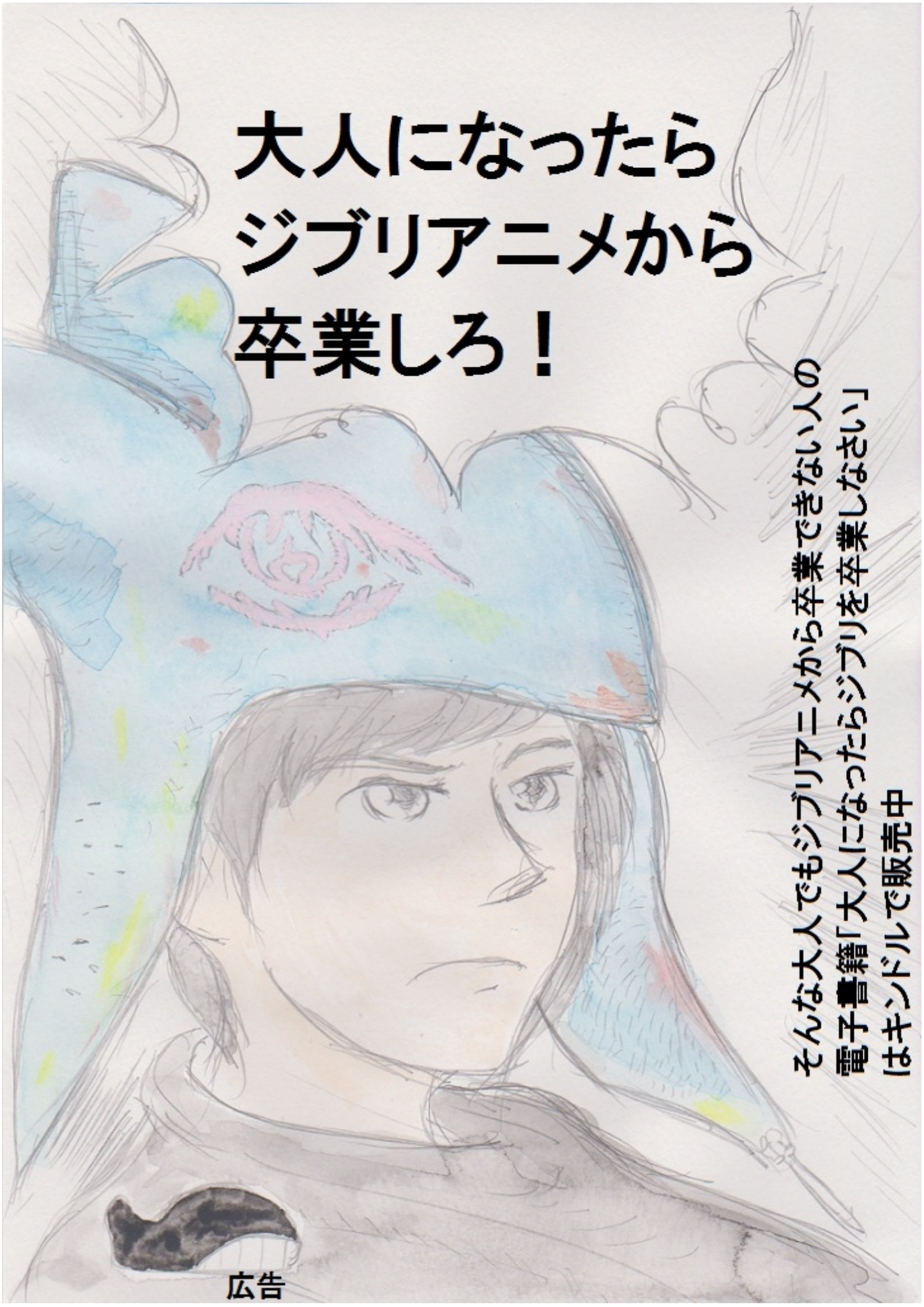
注・ちゃんと批評なら画像を引用しても
著作権法的に大丈夫
ちゃんとした批評なら
アマゾンさんのキンドルで配信中



マンガとかを「天体観測」

マギア☆レコードのスタッフも
見ていないかもしれない
『魔法少女まどか☆マギカ』
のアニメレビューがある

キンドルにあるぞ！　急げ！


大人になったら
ジブリアニメから
卒業しろ！
そんな大人でもジブリアニメから卒業できない人の
電子書籍「大人になったらジブリを卒業しなさい」
はキンドルで販売中
広告